

第2回 横浜市新たな劇場整備検討委員会 基本計画検討部会	
日時	令和3年5月25日(火)15:00~17:00
開催場所	KGU 関内メディアセンター8階 M-803
出席者 (敬称略) (7名)	本杉 省三委員(劇場計画研究者(日本大学 名誉教授)) 明石 達生委員(東京都市大学 都市生活学部 教授) 倉田 直道委員(工学院大学 名誉教授) 坂口 大洋委員(仙台高等専門学校 総合工学科 教授) 立川 好治委員(有限会社ニケステージワークス 代表取締役) 水野谷 良子委員(株式会社ヴォートル 代表取締役) 山中 隆委員(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 館長)
欠席者 (敬称略) (0名)	なし
開催形態	公開(傍聴5名/報道8社)
議題	(1)新たな劇場の施設概要の検討 (2)その他
資料	資料 : 令和3年度第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会 基本計画検討部会資料

議事内容

- 1 新たな劇場の施設概要の検討
- 2 その他

【本杉部会長】

- ・まず、議題に入る前に、議事録の確認を行いたいと思います。第1回基本計画検討部会の議事録については、既に委員の皆様へ送付して頂いております。皆様にご承認頂きたいと思いますが、ご異議ございますか。

【委員】

(異議なし)

【本杉部会長】

- ・異議がないようですので、第1回基本計画検討部会の議事録については、これにて確定させていただきます。ご承認頂きました議事録は、今後、委員会のホームページにて公開していくこととなります。
- ・それでは、議題に沿って進めていきたいと思います。市が検討している基本計画の内容について、委員の皆様から幅広い知見に基づいた指導・助言を頂きたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。
- ・ご発言頂く際は挙手、画面上の下のところにあります。挙手を頂き、私が指名をしましたらマイクをオンにして頂きまして、ご発言頂けますようお願いいたします。
- ・なお、ご発言の後にはマイクを必ずオフにして頂くよう、よろしくお願ひいたします。では、資料に沿って、事務局からの説明をお願いいたします。

【事務局】

(資料の説明)

【本杉部会長】

- ・ありがとうございました。非常に盛り沢山の内容を画面共有無しでやったので、皆さまの手元に資料があればついていけたと思いますが、そうでないと大変だったと思います。いかがだったでしょうか。
- ・大きな項目としては、施設計画の検討、それから関連事業の検討、感染症対策、そして新たな視点での検討について説明がありました。
- ・これからご意見、ご質問を頂きますが、初めてのウェブ会議でもありますので、時間管理が大変難しいと思います。簡潔に発言頂けますようお願いいたします。
- ・また、恐縮ですが、ご発言がどの部分かを明らかにするためにページを言って頂いてご意見頂けますよう、よろしくお願ひいたします。ご意見頂く項目が飛ぶと大変なので、今日はどこからどこに進めていって、どうしても足りない場合、あるいは戻りたい場合はその後で戻ったり、追加でご発言頂くようにしたいと思います。そのような形でよろしいでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【本杉部会長】

- ・発言の際には恐縮ですが、画面の右下にある手を挙げるボタンで示して頂いて、ボタンがない場合は音声ないし映像で手を挙げて頂ければ、私から指名しますので、そのようなやり方で進めたいと思います。
- ・それでは、まず、最初の方の中項目1、舞台関係です。施設計画の検討「(1) 舞台について」というところが5ページに渡ってありますので、この辺から進めたいと思います。特に立川委員は沢山ご意見があると思いますが、いかがでしょうか。

【立川委員】

- ・これまで、劇場の規模、機能について様々な議論してきたと思いますが、現状、現場サイドの人間としてもほぼ満足のいく基本計画になっているように思います。サイズの問題や、フライタワーの構造の問題については、それぞれのジャンルの方で、様々な意見が出る場所とは思いますが、基本的にはゆとりを持った計画を立てておけば、様々な計画に、セットプラン、演出プランに非常に対応し易くなると考えています。
- ・1つだけ、今までの他劇場にはない計画のところ、バレエ床の問題が書かれています。通常時とバレエ公演使用時ということで、使われる床の弾力性及び耐久性の違いが大きくなっていくのだろうと思います。そのときに、バレエ公演の中でも、背景のセットそのものがかなり大きく重量化していくという傾向がありますので、その辺りをどのように対応するかということは事前に十分考えておく必要があると思います。
- ・例えばアクティンギエリアのバレエ用の床、高弾力性の床を用意していても、そのまま使うことが非常に難しいというケースが出る可能性があります。そのときに、重量のあるセットをどのように設置するか。またはその時にこの床を使わないで基本的なバレエ公演ができるようなスタイルを考えておくということが大事だと思います。もちろんこのようにほぼ一面のバレエ床があるということは、バレエ公演の仕込み、リハーサルや、様々なことで非常に大きな利点がありますが、想定している仕様に合わないような公演に対してどのように対応できる、フレキシビリティを持たせていくかということは考えておく必要があると思います。
- ・それと、今までのバレエ床を使ってきた経験によりますと、バレエ用の軟らかい床、弾力性のある床は必ず傷みます。その時に、昨日の公演で傷んだので、今日の公演で使えないということがないように、補修の方法についても事前に十分検討しておく必要があると考えています。

【本杉部会長】

- ・それに関連して、私の方から質問させていただきます。バレエも段々、重量の重い舞台装置が出てきているというお話だったと思うのですが、一枚床の場合だと、ある部分だけ補強する、硬くすることは困難ということでしょうか。鉄板を置く方法などはあると思いますが、それに対して分割パネル式だと、ある部分は比較的硬いといいますか、重いものを乗せても沈まない床にすることができます。あるいは、今補修の話がありましたが、補修でその部分だけ交換できるとか、それぞれ利点と不利な点があると思うのですが、いかがでしょうか。

【立川委員】

- ・理想的には、一枚物のバレエ床、それから別に可搬型の一部を高耐荷重のものに入れ替えられるような、ユニットパネルを組み合わせるような形のもの、どちらでもいけるようにしていくのが望ましいと思います。
- ・その際、床機構としては、側舞台または奥舞台と同一平面になるように、可搬型のをセッティングしたときにも同一平面になるように、床全体を上下して段差がなくなる機構を考えておくのが、理想的だと考えます。

【本杉部会長】

- ・もう一つ、1ページのバレエのアクティングエリアは16メートル角程度でやるというのは、これはこういう理解でよろしいですか。

【立川委員】

- ・観客から見えるエリアとしてダンサーが、実際に動くのは、ほぼ16メートル×16メートル程度と考えて良いと思います。ただ、アクセスする袖舞台、奥からのセットの出入りを考えると、主舞台のアクティングエリアとして、18メートル×18メートルと設定するのは合理的だと考えます。

【本杉部会長】

- ・その他ご意見はございますか。
- ・明石委員、お願いします。

【明石委員】

- ・舞台装置のところですね。ここに関しては素人なので、見間違いでしたら専門の先生方にご訂正頂きたいと思います。今日、事務局から大分詳細なスペックについてのご説明もあって、一方で、この時期に検討委員会というか、部会でどの程度のところまで指示事項として出しておくべきか。あまり細かいスペックを固めることでもないのかなと思います。むしろここに劇場をつくることの意義にもう1回立ち返って、どうしたら良いのかと思いますと、基本的に横浜につくるという意味と、それからもう一つは、最先端のものをつくる。こういう劇場というのは非常に歴史の古いものが多いですが、歴史で対抗はできないので、逆に言うと、最先端のものをつくるというところへ来るのだらうと思います。前置きが長くてすみません。プロセニウムというのは、間口とか額縁という意味で良いでしょうか。

【本杉部会長】

- ・はい。結構です。

【明石委員】

- ・後の方でスマート劇場でしたか、デジタルのことも書いてあるのですが、6ページを見ると、大体今の演目というのは、間口で言って16メートル位あれば十分というか、最高20メートルのものもありますが、その位あれば良いという形ではあります。逆にデジタルの時代を考えると、僕らは昔の3対4のような四角いテレビに比べて、ワイドスクリーンというか、横長のものを見慣れるように現代人はなっているように思います。
- ・それからこの劇場がコロナ対策もあって、少し余裕めにつくる必要があって、しかも2,500席という日本で最大級の席数も入れるということを考えると、プロセニウムの間口を、通常よりワイドにしても良いと思います。それがここならではの、要するに横浜の劇場でしかできないような公演のスタイルになる。つまり、創造性とかクリエイティビティ、以前には無かった、伝統には必ずしも無かったようなものを創造するということや、2,500席という劇場の規模とか、色々なことを考え合わせると、劇場のプロセニウムをワイドスクリーンにして、狭めるときは建具みたいなもので狭めれば良いと思います。専門の先生方がどう思われるかというのが気になりながらの発言ですが。

【本杉部会長】

- ・日本は元々どちらかというと横長、ワイドスクリーンです。歌舞伎などでお分りのとおり、横が圧倒的に長いです。多目的ホール時代になっても1対2以上、縦に対して横が2倍以上のものが多かったです。それが最近クラシックのコンサートなども一緒にやるので、音響的な配慮から縦が長くなって縦横比が変わってきています。

【明石委員】

- ・必ずしも横長にということではなくて、横浜のこの施設でないとできないことが必要ではないかなど。そして、それは古い劇場ではできなくて、最先端だからこそできるというものを持つことによってオリジナリティーが生まれるのではないかというのが趣旨です。

【本杉部会長】

- ・一般的にバレエもオペラも、音楽が主導なので、音楽に合わせた踊り、演技である訳です。従って、ある音楽の何小節かの間に出て、歌って、踊って退場するという流れで進むので、むやみに大きくすると合わなくなってしまうことや、大きな舞台は一般的に大きな舞台装置を要求することになるので、舞台装置にかかるコストもかかってしまうという問題もあります。

【明石委員】

- ・この後登場するのもかもしれませんが、側面の舞台は、可動するとなると同じ大きさがないといけないから、（主舞台を）大きく、長くしてしまうと、それだけ（側面が）大きくなってしまふのだと思うのですが、必ずしもそうでもないのでしょうか。

【本杉部会長】

- ・舞台上に見えているものがそのまま引込まれるというのが考え方ですので、舞台が広く、大きくなれば、その分、側にある部分も広くなるというのが理屈ですよ、基本的な考え方としては。小さな舞台では間口を狭めれば良いとなると、今度は見えない席が増えてしまうことになるので、そこは注意して考えないといけないところだと思います。

【明石委員】

- ・2,500席全部がいつも見えなければならぬと考えるか、間口が狭いような形が良い公演については、2,000席しか見えないことがあっても良いと考えるか、ということもあるように思います。今、決めなければならぬことでもないと思いますが。

【本杉部会長】

- ・ただ、見えない席をつくと、色々な苦情が出てくるので、設計する人は非常に注意しながら設計しますね。自分のところでプロデュースして、制作してチケットを売る場合には自分で値段を決められますが、貸し劇場で他の方に貸してしまうと、劇場が主体で価格を設定できませんので、今、明石委員が仰ることは非常に難しくなってしまうというのは現実的にはあります。

【明石委員】

- ・オーソドックスである方が良いということでしょうか。

【本杉部会長】

- ・基本計画段階であまり特殊解を狙わないのが一般的だと思います。

【明石委員】

- ・なるほど。理解しました。

【本杉部会長】

- ・山中委員はどうでしょうか。今のお話も含め。

【山中委員】

- ・オーケストラピット使用時で 2,500 席は凄く多いと率直に思いました。オペラでも前の人の頭で見えないなど、結構苦情があるものですから、バレエは見易さを考えると、段差を設けなければいけないでしょうし、互い違いの座席にするとか、工夫も必要でしょうか、難しい設計になると思いました。
- ・それと、4面舞台は良いと思いますが、床機構はこれから慎重に検討するとなってますが、上下は必要だと思いますし、それに蓋をする意味で奥からスライドしてくるのは必要だと思います。びわ湖ホールでも左右からスライドさせるというのはあまり使っていないので、その辺はオーバースペックにならないように、経費面を考えてスペックを落としても良いのかも感じました。

【本杉部会長】

- ・坂口委員、次に発言をお願いします。

【坂口委員】

- ・今の山中委員の意見と少し近いのですが、大は小を兼ねるというのを1回整理するというか、舞台は大きい方が良いという意見はメインだと思うのですが、例えば可変型、プロセニウム開口の可変一つにしても、どこをメインに考えるか。最大18メートルだとしても、どこをメインに考えるかによって、音響のスペックとか、明石委員が仰ったように客席の見え方が変わってくると思います。バレエが主体だと思うのですが、例えば合唱の場合、あるいはミュージカルの場合なども、基本計画には入れた方が良い。貸館ではなく主催事業だとしても、主催事業を全部バレエにするというのはあり得ないと思うので、そういう表現をしておいた方が良いと思うのがまず1点です。
- ・それから、山中委員が仰った内容と近いですが、客席の形状と、特にプロセニアムの開口の高さは影響します。今日の資料にも舞台からの視認距離というのが出ていますが、例えば大体何メートル位までに、2,500席全部でなくても80%の2,000席を内包するか、プロセニアムの開口の高さがどの程度になるか、という検討は、基本計画上どう表現するかは別としてシミュレーションしておいた方が良いと思ったのが1点です。
- ・あと、管理運営検討部会と同時並行で議論するのは必要だと思うので、明石委員が仰った横浜ならではというときに、管理運営の理念や運営方針、メインの演目に関してもハード側の議論にも反映した方が良い。例えば反射板の有無にしても、今は付けない方向で議論されていますが、基本計画を理解するというか、第三者が理解する上でも重要だと思います。

【本杉部会長】

- ・今の話に関連して補足したいのですが、次の客席の問題とも関連して、4ページに海外の主要劇場の客席数と舞台数が出ていて、舞台数はこれで間違いないと思いますが、客席数が、例えばバイエルン州立歌劇場は1,911席あって、立ち席が190あるのですが、実はその立ち席の他に見えない席、聞く席というのがあって、これは完全に立ち席の後ろにあります。そういう席もあってこの数です。あるいはパリのバステューユも通常の椅子席とは別に、バスの補助席のような通路に臨時に出てくる椅子もあります。
- ・従って、全部同じ条件で舞台が見えるとか、座り心地が良いとか、日本で普通のホール設計をすると、そういうことが要求されてしまうので、こういう席があっても良いというような、明石委員の発言に関連するのですが、席のバラエティーさがあるということは、それはそれで安い席を提供できるので良いと思います。そういうことを念頭に入れて、席数などを計算すれば良いと思うのですが、全席全て同じように見える、聞こえると思われる、設計する方は大変です。
- ・今の1から5ページの舞台についてのところはよろしいでしょうか。良ければ、6ページからの観客席とプロセニアムという項目でご意見はありますでしょうか。
- ・立川委員、お願いします。

【立川委員】

- ・先程まで議論されていたことと重なるのですが、2,500 という客席数が多いか少ないか、これはそれぞれの公演の主催者によって大きく変わると思います。ただし、横浜のこの劇場の大きな目的として、育成機能ということがうたわれています。育成機能の中には、なるべく安いチケット代で多くの人に見て頂いて、公演に親しんでもらうという側面は必ず必要で、決してそのことをおろそかにしてはいけません。もちろん良い席はそれなりの価格で売れば良いし、安い席でも公演そのものに触れる機会をなるべく多く提供するということが非常に重要だと考えます。

【本杉部会長】

- ・その他にございますか。
- ・私も立川委員のお話と同感で、客席というのは物理的な空間ですので、1列目と10列目の人では全く違う環境にいる訳です。1階席と2階席も違うし、最前列と最後部、20列目だったり、二十数列目だったりするかもしれませんが、その人とは全く違います。それを全く同じ価格で売るのは、それは制作側の理由はあるかもしれませんが、空間的・物理的な環境として違うということを確認していただきたい。今回の計画では主体的に運営に関わるということになっていますので、価格面で席をかなりコントロールできますので、バラエティーに富んだ席があるのはとても良いことだと思います。
- ・必ずしも安い席は遠く、見え難いというだけではなくて、例えば、今でもまだ残っているか分かりませんが、ロンドンのテムズ川沿いにナショナルシアターという演劇の劇場がありますが、あそこでは最前列の2列位が若い人向けの席になっていまして、肘掛けなどをつくらずに、1席当たりの幅も小さいです。その代わり非常に安く売り出しています。一般的には遠い席が安くなるのですが、そうではなくて、かぶりつきの一番舞台に近いところをあえてそういう価格設定にしているという劇場もあります。そういうことも可能性としてはあります。一番大事なのは価格設定なり、様々な席を持っているということだと思います。それが2,500席に散りばめられていれば良いと思います。それが同一の条件でつくりなさいと言われると本当に困ってしまいます。そこをのみ込んで良いよということになると、可能性は広がると思います。
- ・他の方はいかがでしょうか。
- ・7ページのところで、例えば日本国内の大規模劇場が出ていますが、東京文化会館や国立劇場、新国立劇場の席数はこれ以上増えることはない、減ることもないのですが、愛知県芸術劇場などはオーケストラピットに客席を入れた数です。今回の客席数とは少し違うので、そういうところもしっかり見ていく必要があると思います。

- ・それと8ページ目の観客席・プロセニウムについての3番目のところですが、一番右側にシューボックス形と書いてあって、横浜みなとみらいホールや神奈川県立音楽堂といったコンサートホールがあるのは、今回の趣旨とは、ずれている気がするので、参照事例としてはどうかと思います。真ん中にある扇形の中に新国立劇場やその他の劇場も入っていますが、これも音を非常に重視して計画されていて、バルコニーの内側に注目して頂くと、ほぼ長方形です。シューボックスというか、音の跳ね返りがある幅の中でやろうということで、このような計画になっています。
- ・新国立劇場の中劇場は扇形と言って良いと思うのですが、オペラパレスが扇形というと、幅広く捉え過ぎているかなと思いますし、東京文化会館もどちらかというと六角形です。扇形でも長方形のシューボックス形でもない形なので、これも特殊な格好です。扇形の後ろを斜めに切ると六角形になるわけですが、そういう感じですね。
- ・他にありますか。
- ・水野谷委員、お願いします。その後、坂口委員、お願いします。

【水野谷委員】

- ・色々な人が聞けるような席も設けたら良いというお話がありましたが、運営をしていて、可動席を置けるスペースがあると良いと思うことがあります。例えば急にいらっしゃった車椅子のお客様をお入れすることができるとか、ケアのために追加で席が置けるような余裕があると非常に運営がスムーズにいくという場面は時々あります。是非その辺も考えて頂ければと思います。

【本杉部会長】

- ・そうですね。車椅子席の場合、同伴者の席も一緒に計画していく必要がありますよね。
- ・では、坂口委員、お願いします。

【坂口委員】

- ・本杉部会長からご説明があったように、7ページの資料を拝見して、オーケストラピットを入れて使いながら2,500席確保するか、オーケストラピットを使わず客席として転換した場合が2,500席と考えるかによって変わってくると思います。興行の判断もあると思うのですが、バレエのような人の微細な動きが重要な演目を考えていくと、オーケストラピットを使わず2,500席あるいは最大視距離40メートルの範囲の中に客席が入るという考え方のようなものを基本計画に書くなり、どこかで決めた方が良いと思います。

- ・もう一つは、後半に出てくるデジタルの話で、例えばオンライン配信でチケットを売っていくことを考えていくと、劇場の外側にも客席があるような感じになってきたら、それ全体で事業の採算性を考えるという興行の仕方も出てくる可能性がある。客席もバリエーションがあるというのは、単に客席、建築の中だけの話ではなく、オンライン配信を含めた多様な観客を想定した劇場計画というようにすると、全部の座席からパーフェクトな視認性は確保できないかもしれないが、2,500席取れるというような。そのように多様でかつ、言い方は悪いですが、若干優先順位をつけるようにしておいた方が良いのではないのでしょうか。オーケストラピットを使って、かつ2,500席となると相当大きな規模になってくるといえるのはありますし。山中委員がいらっしゃるので、びわ湖ホールでは、この資料だと最大視距離が41メートルと書いてありますが、最後部だとどうなのかというところの意見も伺いたいです。

【本杉部会長】

- ・山中委員、お願いします。

【山中委員】

- ・びわ湖ホールは1,848席となっていますが、これはオーケストラピットをつくらないときの座席数です。オーケストラピットをつくと1,700席位になるのですが、見切れと言いますか、見難くなると、いくら安くても、オペラなどは凄く苦情が来ます。この劇場はバレエを中心に考えたので、クラシック音楽を聞くなり見えなくても安い席ならば文句は言われなと思うのですが、バレエだとかなり安くても、遠くの席でもちゃんと見られる必要があると思います。

【本杉部会長】

- ・私も何年前に、ミュンヘンの立ち席の後ろの、どんなに頑張っても舞台がほんの少ししか見えない席で舞台を鑑賞したことがあります。立ち席についているバーの脚に乗っかって、横桟に乗っかって立っている人の肩越しに見るという、そういう位にしないと見えません。しかし、きちんと椅子があるので、聞く分には全く問題ないという、そういう席です。500円とか、1,000円しない値段でした。値段設定もそれ位にしないと難しいです。
- ・また、ボックス席の最前列と2列目の値段が2分の1のところもあります。私の後ろの席の人が、「失礼ですが、値段はいくらですか」と聞いてきて、いくらですよと切符を見せたら、彼らは納得していました。価格設定は、山中委員が仰るとおり、非常に難しい問題だと思います。
- ・倉田委員、お願いします。

【倉田委員】

- ・素人的な質問になるかもしれませんが、先程もバリアフリーの話が出てきました。これからの時代は、こういった劇場を設けた場合も単なるバリアフリーという以上に、色々な人に対してのアクセスの権利の保障が必要だという気がしています。そういう意味では、最近ではユニバーサルデザインという考え方がバリアフリーに代わってきている訳ですが、劇場にそういったものを適用すると、どういうことに配慮しなければいけないのか。
- ・これも素人的ではありますが、例えば地方の公共施設でも親子席や子供も安心して鑑賞できるようなスペースを設けていることがあります。それから、見えない席があるというお話があったと思うのですが、最近、例えばクラシックとかではないですが、アリーナを会場にした音楽イベントとか、そういったものは必ずモニターがついて、(ステージが直接)見えないところでも見えるような配慮をしています。
- ・今回の劇場において、例えば見え難いところで手元にモニターがあるような、デジタル化とも関係してくるかもしれませんが、そういう配慮というのは、この新しい劇場が単に演じ易いとか、音が良い以外に、社会的な意味でこの施設が新たに備えていくべき機能ではないか。この横浜の施設がより、これからの時代に評価される一つの視点になると思いますので、先程からお話が出ている客席などの中にそういった配慮をする余地というのはあるかどうかをお伺いしたいです。

【本杉部会長】

- ・車椅子、体の不自由な方への配慮は進んできていますし、法律も整備されてきています。ただ、目の見えない方とか、耳が聞こえない方に対して、劇場がどういう提供ができるのかということは中々難しく、耳の聞こえない方に手話で全部を伝えることはできないかもしれませんが、舞台の脇に手話通訳者が立ってやるというお芝居とかはいくつか出てきています。また、目の見えない方に音楽は比較的伝え易いですが、それ以外の伝え方は、まだあまり研究されていなくて、それは大きな課題だと思います。音を体感できる特別仕掛けの椅子があるにはあります。そういったコンサートをやっているところもあります。ただ、どこの席でも、どこの場所でも、といかないところが、車椅子の問題と同じで、難しいところだと思います。他の事例があれば、是非、事務局の方でも調べて頂きたいと思います。

【立川委員】

- ・先程から客席からの舞台の視認性または音の聞こえ方について議論がされています。それを、例えばモニターのようなもので補うことについて可能性がないかというご意見もありました。もちろんそれは十分考えられると思います。これから、むしろ場合によってはそういうことを積極的に取り入れていかなければいけないことになるのかもしれませんが、私の劇場に対する考え方ということであると、仮に極めて視認性が悪い、あまり良い音ではない席だとしても、その劇場の空間で一緒の時間を過ごすという、本来の劇場における楽しみ方というものは、これは何物にも代え難い。そのことを公平性とか、それから単にコストの問題だけで論じるのではなくて、育成機能ということも言いましたが、劇場の公演に対するアクセシビリティ、そこに行きやすくする。そのことで同じ時間を過ごし、同じものを見て、もちろん角度は違うし、様々な条件は違いますが、そこで実際に行われているものを見る体験というのは、何物にも代え難い。このことが劇場の本来持っている基本的な姿だということは忘れてはなりません。
- ・もちろん足りない部分をどのような形で技術的に補うかということは考えるべきだと思いますが、まず初めに、劇場で行われている、舞台で行われているものを、同じ時間を過ごして、共有して見るということ、その体験を本当に大事にすべき。そのことが劇場の基本的な計画、規模、様々な機構ということに対して、第一に大事にすべきことだと忘れてはならないと思います。

【本杉部会長】

- ・水野谷委員、お願いします。

【水野谷委員】

- ・客席数が多いと山中委員からありましたが、列と列の間がもう少しあると非常に案内もし易くて、出入りするお客様も非常に通行し易い。これを是非検討して頂きたいと思います。

【本杉部会長】

- ・列と列の間というのは、前の人と後ろの人の前後間隔という意味ですか。

【水野谷委員】

- ・そうです。客席数にダイレクトに影響してしまうので、ゆとりがないですね。

【本杉部会長】

- ・悩ましいのは、5センチ違ふと20列で1メートルですので1列分となります。その分、5～60席位無くなってしまうということなので、どうでしょう。日本人の体格が以前に比べれば、確かに大きくなってきたというはあるのですが、ヨーロッパの古いタイプの劇場ですと、ご存知のとおり、非常に前後間隔が狭いです。それはどうしてかという、お客様をできるだけ舞台に近づけたいという要求から来ていて、避難の問題も、一どきに通路に出るのではなくて、基本的にコンチネンタルスタイルといって列の横方向に逃げていって、そのまま扉からホワイエというか外に出ていくという、そういう計画になっています。ですから、お客様がまだ中の方に入っていない場合に、立って待っていらっしゃいますよね。

【水野谷委員】

- ・そうですね。

【本杉部会長】

- ・それが劇場の観客席におけるマナーのようになっていて、真ん中辺に座る人はなるべく早く着席する。客席の端部の方は少し遅めに行って、ゆっくりホワイエから自分の席に戻るといように、言葉にはどこにも書いてありませんが、なっています。私が以前いた、ベルリン・ドイツオペラは前後間隔が85センチです。10センチも日本より短いです。ゆったりする方を取るのか、客席をなるべく舞台に近づけるのか、どちらを取るかですね。両方は一遍にできないので、そこは考えどころだと思います。
- ・その他ありますでしょうか。
- ・では、次はフライタワーとオーケストラピット、少し違いますが、その2つの項目。今、オーケストラピットと舞台のこととか客席を重ねて話してしまったので、あまりないかもしれませんが、フライタワーと吊物機構の12ページまでのところで何かあればお願いいたします。
- ・立川委員、お願いします。その後、坂口委員、お願いします。

【立川委員】

- ・オーケストラピットについては、昨今、コロナの問題でオーケストラの団員というのは非常にナーバスになっておりまして、できるだけ演奏者同士の間隔を取り、なおかつある程度の換気を確保したいという要望が非常に高いです。別紙にもありましたが、今後もこのような状況を常に想定していかなければいけないということを考えると、オーケストラピットも余裕を持った面積を確保した方が良いと思います。もちろん、客席との関係もあるので、客席の床下部分を広げることを考慮していく必要があると思います。

【本杉部会長】

- ・客席の床下ですか、舞台の床下という意味でしょうか。

【立川委員】

- ・舞台の床下です。舞台側の床下に拡張できるようにということです。

【本杉部会長】

- ・了解です。
- ・坂口委員、お願いします。

【坂口委員】

- ・例えば12ページに色々な施設の吊物バトンの数などが出てきていますが、一方で、11ページの書き方だと、バトンは相当数あった方が良いというニュアンスになっています。特にバレエをメインで考えた場合、こういった機構に必要な特徴というか、優先順位はどう整理していけば良いでしょうか。一般的に50本位あれば良いという話なのか、あるいはもう少し特殊な与条件が出てくるのでしょうか。

【本杉部会長】

- ・いかがでしょうか。2つ考え方があってと思います。1つは、この表の中に照明ブリッジという項目が12ページのところにありますが、この照明ブリッジを固定的に付けるという場合と、照明ブリッジも移動できるという考え方。バトンの数も、日本の場合はこの位が標準ですが、ヨーロッパのオペラ劇場だと、バトンの間隔が日本の3分の2位、あるいは極端に言うと半分位のところもあって、100本くらいバトン数がある場合も普通にあります。それは考え方の違いで、使えないバトンがあっても良い。ただ、使いたいところにバトンがないのは困るという考えのもとにできるだけ多く揃えておくという考え方。それはもちろんコストにも影響するので、日本ではある程度間隔をおきながら照明ブリッジも、動かせるようにしているところが最近、いくつかありますが、固定で設けるというのも多いです。1回1回変えるのはそれなりに大変なので、それは舞台運用上、過度な要求だということだと思います。ヨーロッパでは固定的になってしまうのは、レパトリーシステムで毎日公演を行うので、それを毎日取り替えることは実質的にはできません。昼間にリハーサルをやって、夜は公演というのを、一日の中で2回、3回取り替えることはできないので、固定化されていくという考えだと思います。そこはどういう考えでいくのかということだと思いますが、立川委員、何かありますか。

【立川委員】

- ・メインアクティングエリアが 18 メートル×18 メートルというのが数字として出ています。このサイズの場合に、フライタワーと吊物機構の照明ブリッジの数、ブリッジの間に設置されているバトンの数というのは、例えば照明ブリッジが 5 本でバトンが 50 本ないし 60 本というのは、決して多過ぎる数ではないです。3 幕ないし 4 幕あるバレエの全幕公演のときに、1 幕と 2 幕と 3 幕、4 幕、それぞれのセットをそれぞれの空間バランス間隔で仕込んでいくと、60 本位あっても、決して多過ぎるということは全然ないです。例えば幕だから厚みがないので、もう少しバトン間隔が詰まって、あと 1 本 2 本バトンがあったら転換がスムーズにいくとか、セット自体が綺麗に飾られるということは沢山あります。従って、ブリッジが 5 本で、バトンが 60 本前後というのは、決して過度な数字ではないと思います。
- ・もう一つ、吊物機構のバトンの一本一本のスペックをどうするかということがかなり重要な問題になってくると思います。バトン 1 本あたりにどの位の重量の物を吊ることができるか。それをどの位のスピードで動かすことができるか。同時に何本位のバトンをコントロールできるソフトウェアをコンピューターに導入するか。まだ先のことになると思いますが、バトンの数が多くなればなるほど、公演計画は楽になりますが、その辺の全体をコントロールするシステムはどんどん複雑になっていきます。それでも自由度が高い方が良く今のところは考えています。

【本杉部会長】

- ・今後、照明も LED 化に向かっていって、ムービングライトが導入されてくるので、ブリッジの扱い方も考え方が少しずつ変わっていくと思います。
- ・12 ページの表でいうと、どん帳を付ける予定は無いと思いますので、無くても良いと思います。
- ・他になければ、次のところに行きたいと思います。バックヤード、それからリハーサル室、その辺まで含めていかがでしょうか。
- ・バックヤードでいうと、15 ページのところ絵が描いてあって、荷下ろしスペースが黒く塗り潰してあって 2 メートルとありますが、実際のスペースはこれでは足りなくて、コンテナの場合には後から出すことになるので、後ろ側にこの長いものを扱える場所、広がりが必要ですし、11 トントラックの場合には後ろと横の両方に出すので、その両方にある程度の場所が必要になってくると思います。

- ・また、高さ関係が書いていません。トラック自体の寸法は書いてありますが、11 トントラックの場合、ガルウイングというか横出しで扉が跳ね上がるトラックの場合には、トラックの高さに跳ね上がる扉の高さが加わってくるので、その高さも見込んでおく必要があるということと、トラックが入ってシャッターか何かで閉まらないと外の音が入ってきたりするので、トラックが入った状態でシャッターが閉まるということも1つの条件になってくると思います。
- ・皆様から、意見は他にありますかでしょうか。

【明石委員】

- ・良いでしょうか。

【本杉部会長】

- ・お願いします。

【明石委員】

- ・バックヤードは、どうしても交通と一体になってしまうので、少しそっちにも入ってしまうかもしれませんが、コンセンサスとして、まず、Kアリーナ側が裏にあって、とちのき通り側が正面と想定するという資料に大分、なっていると思います。
- ・もう一つ、20 フィートコンテナを入れることについて、書き切った方が良いと思います。それは横浜ならではなると。事務局の説明にもありましたが、海外からの船がどこに着くかにもよりますが、本牧へ着いても、大黒ふ頭へ着いても、みなとみらいの中は臨港幹線という名前が付いています。その臨港幹線を通して港の機能と一体にあるからこそ横浜にあるということ、報告書を書いたり、どこかで言うときには強調しても良いのではないかと。なぜ横浜でつくるとかということに関係してくると思いますので、20 フィートコンテナを入れて、地方へ行くときは11 トンに積み替えるということ、書いた方が良いでしょう。
- ・もう一つ、トラックの旋回について15 ページに書いてあります。トラックもバスも、とちのき通りではない横の道2つを、どちらかから入ってどちらかから出る形になると思いますが、横の道の海側というか、ホテルや水族館がある方は鋭角で曲がることとなります。この資料では直角に曲がることになっていて、スケールがあるので、きちんと精査すれば、気にすることは無いのかもしれませんが、鋭角に入らなければいけないことは、意識して描かないといけない大きさだと思います。

【本杉部会長】

- ・倉田委員、お願いします。

【倉田委員】

- ・今回の資料ではバックヤードそのものを取上げており、その中で車の回転半径などを示しているだけなので不十分です。特に 40 フィートコンテナと 11 トントラックの比較をするのであれば、もう少し周辺の接道条件などを勘案した上で、そこからどう入るかということを検討しないといけないというのが1つ。
- ・あと、つまらないことで恐縮ですが、40 フィートコンテナと 11 トントラックの場合の比較について、いずれもバックヤードの広さは全く同じになっています。従って、資料を見る限り、40 フィートコンテナのスペースの中には 11 トントラックも入りますという程度の理解しかできません。11 トントラックならばこの位、狭くて済むという比較の絵になっていないとおかしいと思います。通路幅も含めてバックヤードのサイズが全く同じであって、これではあまり比較していることにならないと思いました。
- ・ポイントは明石委員が仰ったとおり、バックヤードに至るまでのアクセスについて、備えておくべき条件を確認することだと思います。例えばバックヤードの中だけは入るが、そこに至るところで障害があるのであれば、こういう形では 40 フィートコンテナを入れるのは難しいということになってしまうので、その辺を資料としても確認しておいた方が良いでしょう。

【本杉部会長】

- ・その他ございますか。
- ・立川委員、お願いします。

【立川委員】

- ・バックヤードの件ですが、道路からどのような向きでどういう方向から入ってくるか。荷捌きスペースに着けて搬入・搬出できるかということ、これは非常に大事なことです。もう一つ、車寄せの部分やバスのアクセス経路が後の方で出てきます。私の今までの経験によると、40 フィート又は大型トラックの搬入・搬出の時間と、お客様が乗ってくるバスないし乗用車の出入りの時間は重ならないです。従って、スペースの取り合いの中で、一部を共通に使えるような経路を考えるということではできると思います。全体の配置計画の中でどの位の幅、距離、スペースが要るかということ複合的に考える必要があると考えます。

【本杉部会長】

- ・他になければ、「交通課題への取組について」に移っていきますが、いかがでしょうか。既にいくつか話が出ていますが。
- ・明石委員、お願いします。

【明石委員】

- ・バスに乗ってくる方々が、Kアリーナとの間の裏のところを想定して入っていますが、ここで降りて、いきなり劇場の中へ入って見るものを見て、直ちに帰ることが絶対できないようにしてほしいです。劇場へ入るまでに数分間かけながら、胸を高鳴らせていて、いくつかの空間のシークエンスを通って行って、正面を見て、ホワイエの高い天井を見て中へ入るということで心構えをさせるように、設計条件が必要だと思います。それをしない建築家はいないと思いますが。

【本杉部会長】

- ・その他ございますか。
- ・倉田委員、お願いします。

【倉田委員】

- ・交通課題の取組について、第1案、第2案とあって、基本的にはいろいろな種類の車がどうアクセスして、どこで降ろしたり、乗せたりするかというようなことが記載されていますが、先程ご指摘もありましたが、時間によっても違う訳です。同時に、歩行者の動線を入れて頂きたいです。場合によっては歩行者の動線と重なることがあって、車だけで言うと、これで十分機能しているかもしれませんが、歩行者を入れると、干渉し合う部分が出てくるかもしれません。歩行者はもう一つ上のレベルで処理することも考えられるので、立体的に処理できるかもしれませんが、いずれにしても歩行者を入れた形で動線が機能しているかを確認してほしいと思いました。

【本杉部会長】

- ・その他ございますか。
- ・水野谷委員、お願いします。

【水野谷委員】

- ・倉田委員から歩行者の動線の話がありましたが、高齢者、体の不自由な方の動線の配慮を是非お願いしたいと思います。増々、これから重要視されてくると思います。その場合、タクシーで来て車寄せから入る、自家用車で駐車場に回って駐車場から劇場まで入るといったような動線になると思います。車を降りた後、どう歩いていくかということが非常に重要で、できるだけ短い距離で入り口までアクセスできるという配置関係が必要だと思います。

- ・確かに色々な風景を見ながら、素敵な環境を歩きながらということも大事ですが、高齢者ですとか、体の不自由な方の動線はできるだけ短く取られた方が良いという実感を持っています。それから団体の方々がバスから降りて入り口まで移動するときの距離、これほどのような動線になるのか示した方が良いと感じました。
- ・もう一つ、高齢者や体の不自由な方について、個人的な意見ですが、平等とか共存という視点からも一般のお客様と同じ入り口から入れるようになっていた方が良いと感じています。

【本杉部会長】

- ・坂口委員、お願いします。

【坂口委員】

- ・昨年度の検討では、全体の延べ床面積が4万4,000平米、ホールエリアが1万7,000平米、創造支援が7,000平米となっていますが、基本計画を詰めていくと、各諸室の面積構成が出てくると思います。そのときに、全体の延べ床面積に対するオープンスペースの延べ床の割合というか、公共ホールは、昔に比べるとオープンスペースの割合が増えてきていると思います。検討の項目の中には、個々のパーツの話はありますが、全体の面積配分においてどういう割合にしていくのかという部分と、例えばさっきのバックヤードにしても、どれ位の規模で考えるのかという積み上げの話、もう一方、上からの押さえみたいな話はあった方が良くと思うので、どこかで整理をした方が良くと思います。
- ・もう一つは18ページの図ですが、主要諸室、全体の部屋を入れた形でダイアグラムを作った方が、個々の部屋がどう繋がっているのかが分かると思います。今、部分部分の議論がありますが、一方で諸室が全体にどう繋がっているのか、2万3,000平米の敷地の中にどう収まるのかということ、交通の議論もそうですが、同時並行でやっていった方が、皆様の貴重なご意見がずれていかない気がします。

【本杉部会長】

- ・今まで主にAブロックが議論されてきて、その次がBブロックです。Bブロックについては、取りまとめというよりも質疑応答のような形で進めていきたいと思っています。Bブロックの整備の進め方は、今後、課題になると思います。劇場整備そのものであるAブロックは市が主体的に進めていくことになると考えています。
- ・一方で、Bブロックは、駐車場の整備をはじめとして、土地の価値等を考えていきますと、一般的には民間のノウハウを活用した整備が考え易いと思われます。また、第三セクター等改革推進債や埋立事業会計の用地であり、一般財源の負担を要するものという説明もありました。

- ・このA・Bブロックの全体について、民間活力の活用と劇場整備という特殊性、さらに交通基盤の整備などの公共性も踏まえて、整備の進め方を今後どうしていくのか、検討を進めて頂きたいと思いますが、市としてどのように考えていらっしゃるかお聞かせ願えますでしょうか。

【事務局】

- ・Bブロックにつきましては、まず、建物の中身をどういった機能にしていくのかといったことを考えなければならず、まだそこが課題として残っております。
- ・一方で、交通基盤を一体的に整理していく、あるいはせつかく劇場があり、向かい側にある建物として、劇場の関連の機能も要るかもしれないということで、まだ整理すべき課題がございます。一体的な開発で物を捉えるのか、それぞれ分かれた形で捉えるのかは、色々な議論があると思いますので、第3回、第4回、部会の中でも題材を出しながら、各委員のご意見も伺っていきたいと思っております。

【本杉部会長】

- ・今日議論してきた中で、市から委員の意見に対して、このように考えていますという補足があったらお願いします。

【事務局】

- ・時間の関係がありますので、2つ補足させて頂きたいと思っております。観客席の数の関係です。昨年度の検討委員会の提言の中では、2,500席規模で考えようと一旦整理をさせて頂きました。そういう意味では、規模という感覚について共有化させて頂いたと思っております。
- ・昨年度までの議論で本日は触れられていなかったもので、補足をさせて頂きます。日本の特殊な事情もあると思いますが、例えばオペラやバレエのような海外招聘プログラムをやったとき、1席当たりの値段がいくらで皆様に見て頂けるかということは非常に大きなテーマになると思います。海外のオペラ等を招聘した場合には、劇場名はあえて言えませんが、日本の中でも3,000席近いところを使って、そこで1席あたりの値段を下げた多くの人に見て頂いていることもございます。
- ・そういう意味では、質としての高さが重要であることは各委員のご指摘のとおりであり、今後も検討していきたいと思っておりますが、一方で、自主事業とはいえ、劇場経営が持続あるものにするためにどうしたら良いのかといった、これは運営側の論理になるかと思っておりますが、そういった点も併せて総合的に、提言をブレークダウンして検討していきたいと思っております。

【本杉部会長】

- ・皆様のご意見、事務局からの説明を受けて、最後にこれだけはということがあれば、お話しして頂いてからまとめたいと思いますが、ご意見がある方がいらっしゃいますか。
- ・坂口委員、お願いします。

【坂口委員】

- ・最後のデジタルのところの話をしてもいいですか。

【本杉部会長】

- ・はい。

【坂口委員】

- ・デジタルに踏み込んだ提案をこれからしていくにあたり、例えば単純に公演のオンライン配信だけでなく、そういうことが設備的にもできる劇場として日本の中で位置付けていこうと考えたときに、例えば照明のスペックも、それが映ったとき、どれ位良いクオリティになるかという観点から舞台設備のあり方を考えるというのもあると思います。
- ・例えばスポーツの分野だと、試合を配信するときの観点からスタジアムの照明を決めるというのはヨーロッパでやっています。そういう考えからすると、無観客の演奏を前提とした例えば客席照明のあり方などは、日本のホールでは全く経験がないですが、これからの、できるのが10年位だと思いますが、その段階では、今とは社会状況が変わっている可能性もあるので、単なる配信よりもう一步踏み込んだ観点からの劇場のあり方というのもあると思いました。
- ・あともう1点は、相当スペックが大きい劇場なので、サステナビリティというか、どれだけ持続的に運営も含めてやっていけるかというのを、つくっていく段階から考えていく。改修のあり方とかエネルギーの問題も議論が避けられないと思うので、どこかで項目を決めて検討していくべきだと思います。

【本杉部会長】

- ・すみません。デジタルシフトのことですね。スマート劇場のことを検討しなければいけなかったのですが、時間に追われて見失っていました。他にご意見ありますか。

【明石委員】

- ・もう1点だけ良いですか。

【本杉部会長】

- ・はい、お願いします。

【明石委員】

- ・隣のKアリーナとの関係、計画調整について、今回の資料では、劇場の敷地のことに完結して書いてあって、Kアリーナの間に道を1本入れるという感じですが、もし今後、Kアリーナの計画との調整ということがあり得るのでしたら、それも今後は資料に入れて頂いた方が良いと思います。

【本杉部会長】

- ・山中委員、お願いします。

【山中委員】

- ・坂口委員から無観客での配信という話がありました。今、コロナでそういうこともあります。基本的には劇場でお客様に見て頂いて、さらにそれを配信するというのが、両方考えられると思っていて、無観客よりは、お客様が入って演じておられる。それをさらに配信するというのをメインというか、通常で考えていってはどうかと思っています。

【本杉部会長】

- ・他にありますか。
- ・無いようでしたら、まとめに移ってきたいと思います。
- ・今日は初めてのオンライン会議ということで検討を進めさせて頂きました。大変貴重な、重要な指導・助言を頂けたと思っております。
- ・一つ一つ確認しませんが、次回に向けて、私の方から3点程、確認したいと思います。最初の1点は、劇場の各部分の計画内容については議論が深まってきました。本日の議論を踏まえて、引き続き修正することを検討して頂きたいと思えますし、坂口委員からもありましたように、もう少し全体ということも加えて検討していければと思っています。
- ・2点目は、交通計画です。施設整備の観点からも重要な要因です。コンテナ車、バス交通などの話も今日出ましたが、具体的なプランとしてはどうなるのかも含めて、さらに検討を深めて頂ければと思います。
- ・3点目は、駆け足になってしまったスマート劇場、デジタル化についての取組です。新たな劇場整備におけるチャレンジングなテーマです。デジタル技術の進展は日進月歩で進んでいますので、手段の変化が先行して、本来の目的が後から追いかけていく形にもなりがちなテーマです。部会としては、あまり確定的に決めてしまうということではなく、今後も検討委員会の中でしっかり説明して頂いて、皆様からも意見を頂ければと思っています。市も様々な議論の場を想定しており、他のワーキンググループもあるようですので、是非積極的に検討を進めて、深めて頂ければと思います。
- ・以上を私の今日の取りまとめとしたいと思います。皆様いかがでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【本杉部会長】

- ・ありがとうございます。
- ・では、進行を事務局に戻したいと思います。

【事務局】

- ・ありがとうございました。
- ・本日は長時間に渡りまして、誠にありがとうございます。次回の部会の日程につきましては、今後調整させて頂き、改めてご案内をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。
- ・それでは、以上をもちまして、第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会基本計画検討部会を終了いたします。本日は、皆様ありがとうございました。